

# 平瀬徹也教授の御退任にあたって

芝 健 介

平瀬徹也教授は、1968年4月御着任以来、34年間の長きにわたって文理学部史学科で教鞭をとられた。御専門の西洋史はもとより、歴史学全般、現代世界の状況全体、さらにはまた「新渡戸稲造の植民思想」という御論考もあるように初代学長の事跡に始まって、本学の歴史、内情にも広く通じていらっしゃる先生である。

御研究については『史論』第55集掲載の業績一覧表に詳しいが、わけでも焦点を、フランス人民戦線史を軸とするフランス近現代史研究、また第1次世界大戦、第2次世界大戦という二つの世界戦争をめぐる研究、さらにヨーロッパ現代国際関係史研究の分野におかれ、他の追従を許さぬすぐれたお仕事を積み重ねてこられたように思われる。

代表作『フランス人民戦線』（近藤書店 1974年）は、なまなましい政治的テーマを扱うことの多い現代史研究がしばしば党派性にとらわれ、このテーマの場合もコミンテルン・サイドに傾いた類書が少なくない中、邦書では唯一偏せずバランス感覚絶妙の鮮かな総合的歴史過程分析を示された。内戦期スペイン人民戦線についてはG・オーウェルやヘミングウェイの紹介以来、日本でも歴史研究は夥しくあるが、フランスの人民戦線については、これまでの解釈の妥当性を、歴史的コンテクスト、局面に引き戻して、一つ一つ丁寧に問い直し委曲を尽くして吟味された平瀬先生のこの貴重な研究を凌ぐものは、その後も現れていない。レオン・ブルムやモーリス・トレーズ、ダラディエ等の政治家群像も見事に生彩を放ち、人物描出ひとつとってみても、後に続く者が必ずや参照してしかるべき金字塔的研究と申し上げられる作品であろう。

南京、ホロコースト、広島、長崎等、第2次世界大戦におけるジェノサイド犯罪と比較するとき、無意識裡にわれわれは第1次世界大戦とその重大な世界史的意義を稀釈しがちである。平瀬先生の第1次世界大戦研究の特徴的な点は、一つの時代の終わり、古典的帝国主義時代のおわりとして従来把握されてきた大戦をむしろ新たな時代の始まりとして捉え直し（「第一次大戦とヨーロッパ」『岩波講座 世界歴史 現代1』1970年）、大戦が、惨たる大量死経験はじめ人びとの心に与えたインパクトを決定的に重視され、どれほどその後に深甚な影響を与えたか、一貫して強調されたところにある。「第1次世界大戦前の西ヨーロッパの精神的風土と両大戦間の時期のその間の重要な相違の一つが、後者における反戦平和の思想と運動の成長であるということ」は誇張ではないであろう。敵国への憎悪と愛国的熱狂のうちに開始された第1次世界大戦と、深い挫折感とあきらめのうちに開始された第2次世界大戦との対照的な

開幕もこれと無関係ではない。換言すれば、第1次大戦の衝撃が各国民の意識におよぼした永続的影響はそれほど大きかったのであり、歴史は単純には繰り返さないのである」（「フランス社会党とミュンヘンの宥和」『季刊 社会思想』創刊号 1971 年）という御指摘には、今なお後進をして深く考えさせる含蓄と味わいがある。

鋭い読みに基づけられた数々の御書評、「歴史学界の回顧と展望」における御論評を通じて、先生は、歴史の探求における「過去からの惰性」につねに厳しく、「発見」を何より尊ばれた。一方で、社会史の「流行」への素早い「変身モード」というべきか、研究子の関心のベクトル自体がこれまでの方法に対するきちんとした総括を往々にして等閑に付しがちな傾向を批判されたが、他方では、第二次世界大戦の日常史、社会史の課題そのものには柔軟縦横に応えられている（たとえば「第二次世界大戦像再検討のために（上・下）」『現代史研究』1987/88 年；「第二次大戦と民衆」（『歴史評論』1990 年 8 月号）。とにかく国家的イデオロギー的対立から解放されなかった 20 世紀ヨーロッパの複雑な歴史、またその中に潜められていて十分に引き出されることのなかった新しい事実や可能性を索出していく場合の、最良の導き手としての現代史研究を、先生ほど懇切に開示してくださる方はいないであろう。この愛書家の泰斗は、また普段から、なまなかなジャーナリストも顔色なからしめるほど（新聞小説はもとより）『朝日新聞』にしても『学報』にしても隅から隅まで眼を通しており、史学研究室のたまりや職員食堂で独特のユーモアと笑いを交えての世界「現在史」談義も実に面白く学ぶところ数多く、今後毎日拝聴できなくなったのを残念至極に思うのは、怠惰な筆者ばかりであるまい。女子大が女子大らしかった「よき時代」の「最後のモヒカン族」と申し上げたら叱られそうであるが、かくも学生のことを慮り学生から最も慕われた師らしい師は、今後後続教員からは輩出しないのでは、と感じられる稀有の先生であられた。バリバリの現役の歴史家としてなお一層史学の道を私どもにお示し下さらんことを！